

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学工学部1年 島津 咲希

1. 学習成果

留学中、異文化交流を目的としたディスカッションの授業では、自分の語彙力が足りず、伝えたいことを十分に表現できないもどかしさを感じた。そのため、より英語を学びたいという意欲が高まった。一方で、母国語や文化が異なっても、互いに理解し合い、意見を共有することの楽しさを実感した。

特に留学後半では、友人との日常会話の中に積極的にスペイン語の単語を取り入れるようになり、無意識にスペイン語が出てくることもあった。たった2週間という短い期間で、自分の言葉に影響が生じたことは非常に興味深く、自分の言語習得能力や環境適応力について新たな発見があった。

2. 海外での経験

今回のプログラムでは、京都大学の学生と共同生活を送りながら、ホステルでの宿泊を経験した。ホステルでは毎晩、宿泊者同士で夕食を作るイベントが開催されており、私も参加した。スペインの代表的な料理であるパエリアやピンチョスを作りながら、現地の人々や世界各国からの旅行者と交流する機会を得た。

また、スーパーや土産店では、店員とスペイン語で会話をし、商品の成分表示などを読み取ることができた。さらに、街中では日本語の漢字がデザインされた洋服を着ている人が多く、それが会話のきっかけになることもあった。これらの経験を通じて、言語を学ぶことの実践的な楽しさを実感した。

3. プログラム内容

プログラムでは、さまざまな活動を通じてスペイン語やカタルーニャ語、バルセロナの文化・歴史について学んだ。

・ スペイン語の授業

グループでタスクをこなしながら学ぶ形式で進められた。特に印象に残っているのは、日本の料理のスペイン語レシピを考える活動であった。少人数クラスだったこともあり、質問しやすい環境が整っていた。

・ カタルーニャ語の授業

挨拶などの基本的な表現を学び、簡単な例文を用いて実際に会話を試みた。

・ 市内ツアー・大学内ツアー

バルセロナの歴史や文化を学ぶ機会が多く、授業も非常に分かりやすい英語で行われたため、理解しやすかった。

・ プレゼンテーション

バルセロナ大学に留学している学生とディスカッションをしながら、2回のプレゼンを準備した。スペイン語でのプレゼンを想定していたが、ディスカッションに参加する学生のほとんどがスペイン語を話せなかったため、驚いた。限られた時間の中で準備するのは大変だったが、貴重な経験となった。

・ 語学学校の日本語授業への参加

日本語を学んでいる現地の学生と交流し、自己紹介やピクニックの計画、折り紙などの活動を行った。できるだけ日本語で伝えようと試みたが、それが意外と難しく、コミュニケーションの工夫が必要だった。しかし、相手に伝わったときの喜びは大きかった。また、現地の学生が熱心に日本語を学ぶ姿を見て、自分もスペイン語や英語の勉強をより頑張ろうという刺激を受けた。

4. 進路への影響

今回の留学を通じて、将来的には外資系企業で働きたいという気持ちが強くなった。また、異なる文化の中でも適応しながら生活できる自信がつき、知らない土地でも何とか生きていけるのではないかと感じるようになった。

さらに、ヨーロッパでの長期留学への関心が高まり、公用語が英語ではない国への留学に対する不安が和らいだ。現地の言語を学ぶことで、その国の人々とより良い関係を築けることを実感し、語学学習の重要性を再認識した。